

中国農村の隔世世帯の形成における当事者の意識

——当事者の戦略と世代間関係——

張 継元

近年中国では隔世世帯が急増している。これまで工業化・都市化および都市・農村の二元社会構造が隔世世帯の形成要因であると指摘されてきたが、本論では先行研究が前提としてきた孫育ての自明性それ自体に問いを投げかける。質的データを用いて、家族戦略論のアプローチから、なぜ祖父母が孫育てを引き受けるのかを分析した結果、①孫育ての規範が存在していること、②育児の家族戦略であること、③一種の老後生活のための戦略であること、という三つの要因が得られた。さらに、そのような孫育ての規範と家族戦略の背後に、世代間関係の変容という重要な要因が存在することも明らかにした。

1 問題の所在

近年中国の世帯形態のなかで、日本では馴染みのない類型が急増している。それは隔世世帯¹（中国語：隔代家庭／隔代戸、英語：skipped-generation household）という世帯形態である。隔世世帯とは三世代以上から形成され、その中間世代がなんらかの原因で欠落した世帯形態をさす。その多くは祖父母と孫から構成されている（以下、混乱を避けるため、祖父母世代、親世代、孫世代という表現を用いる）。隔世世帯で生活する孫世代は主に、大いにケアが必要と

なる0-14歳である（図1）。その身の回りの世話は一緒に生活している祖父母が担い、生活費や教育費などは親世代からの仕送りによって賄われているケースが多い。

図1に示すとおり、1990年から2005年まで隔世世帯の増加は著しいものであった。隔世世帯で生活する人々が全人口に占める割合は、1990年の0.50%から2005年の3.89%にかけて、15年間で7倍に急増した。隔世世帯で生活する14歳以下の児童が14歳以下の全児童に占める割合を見ると、1990年の0.49%から2005年に7.51%となり、15年間で15倍に急

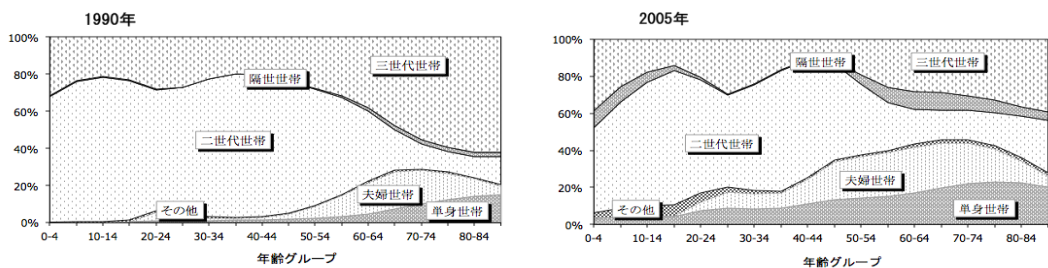


図1 類型別の世帯人口の年齢分布図

出典：郭（2008:7）

増した（郭 2008）²。

日本の家族研究においても、中国の隔世世帯は「無視しえない重要な類型」（池岡 1997: 53）であり、「この形態は経過的な要素が強いので」、「ライフコース上での経験率のようなものでみた場合には、より重要度を増すだろう」（石原 2009: 26）と、その重要性が述べられている。

しかし、1990年代に池岡（1997）が言及した研究対象の構成やその形成要因は、2000年代に石原（2009）が議論した現在のものとはやや異なる。

1990年代の中国の隔世世帯は主に都市部に多く、その隔世世帯の形成には夫婦の共働き、都市の近代化水準の不均衡などの要因が取り上げられている（池岡 1997; 王 2006a,b; 郭 2008）。親世代に共働きが圧倒的に多いのに対し、祖父母世代が定年退職しているため、親世代よりも時間的余裕のある祖父母世代が育児を行う傾向が見られた。特に教育資源に関して、親世代の住んでいる都市周辺部の新築住宅地の教育の整備が、都市中心部よりも遅れているため、子供により教育を受けさせようと、子供の戸籍を祖父母の住所に移して預ける傾向が見られた（王 2006a,b）。

一方、現在では隔世世帯は農村部に最も多い。2010年の第6回全国人口センサス調査によれば、都市の隔世世帯が都市の全世帯に占める割合が1.39%であるのに対し、鎮は2.5%、郷村³は3.11%である。また、農村の隔世世帯が全隔世世帯に占める割合は7割を占めている。地域別に見ると、北京や上海などの大都市では1%前後であるのに対し、貴州省（6.35%）、四川省（4.05%）、河南省（3.77%）などの「農業大省」においては3%を上回る比率となっている。このような分布から、隔世世帯はおもに

農村に集中していることがわかる。

農村の隔世世帯の増加は、おもに産業化・都市化に伴う出稼ぎと、都市・農村の二元構造によるものであると指摘されている（王 2006a,b; 郭 2008; 石原 2009）。中国の産業化・都市化の進行に伴い、農村から都市へ出稼ぎに行く労働者の規模は非常に大きくなっている。親と一緒に都市で生活する0-17歳の児童の規模は2005年の時点で2533万人であり、農村に残された0-17歳の児童の規模は7326万人である（楊ほか 2011）。農民工の親世代が子供を農村に残すことを選好したのは、①一緒に都市で生活する費用を負担できるほど収入がないこと、②忙しくて子供の面倒を見ることができないこと、③仕事や住まいが不安定であること、④都市で就学するうえで制約があること、などの要因によると分析されている（許・張 2010、楊ほか 2011）。

確かに、構造的な要因は隔世世帯の急増をもたらした社会的要因として重要である。しかし、これらの議論には大きな問題点がある。隔世世帯の形成は、親世代の育児困難と祖父母世代の孫育ての引き受けという二つのプロセスに分解できるが、これらの構造的要因は親世代の育児困難を説明しているに過ぎず、祖父母世代が孫育てを引き受けることを直接に説明していない。ここでは産業化・都市化と都市・農村二元構造という社会の構造的要因によって、一部の農民工の親世代が育児できなくなることが、子供を祖父母世代に預ける決意に結びつくと言明してきた。しかし、この「預ける」という言葉の意味は夏休みや冬休みの帰省のような短期間のものではない。1-2年間のものもあれば、3-10年間のものもあり、祖父母世代は親世代のかわりに育児を引き受けるのである。農作業など自らの家計も営みながら孫を育てるこ

とは、祖父母世代にとって決して容易なことではない。引き受けないという選択肢もあるなかで、多くの祖父母世代が孫育てを引き受けるのはなぜだろうか。この問いは、産業化・都市化と都市・農村二元構造という構造的要因のみでは説明しきれない。

そのため、本稿はこのような従来の研究の死角を補うために、中国華北の農村の隔世世帯の祖父母らに対するインタビュー資料を用いて、農村の祖父母世代が孫育てを引き受ける意識的な要因を明らかにする。

2 先行研究の批判的検討と分析視角

中国の研究には祖父母世代が孫育てを引き受ける要因に関する分析は少ないが、いくつか伝統的な文化と規範に言及するものが見られる⁴。たとえば、一部の先行研究では「含飴弄孫」（飴をなめながら、孫をあやす）、「伝宗接代」（代々血統を継ぐ）といった伝統的な家族倫理観や伝統意識を取り上げ、孫育てが規範であるように述べられている（李 2004; 黄 2006）。しかし、孫育てが本当に伝統的な文化または規範なのかという疑問も抱かざるをえない。なぜなら、これらの議論は実証研究に基づくものではなく、推測に過ぎないからである。指摘された「含飴弄孫」などの伝統が物語っているのは、三世代が同居し、もしくは息子と孫が一堂に会し、孫をあやしたりすることであり、祖父母世代が孫の育児に参与することは認めても、隔世世帯の祖父母のように親の代わりに育児することを意味しているわけではない。育児に対する中国の伝統的な意識は、費が提起した父・母・子という「基本三角」（費 1998: 159）の概念が示すように、父母の責任であるとされる。祖父母が同居するとしても、林（1989）が描いた 1930

年代の農村家族のように、同居の祖母は家族の象徴的な権威として尊重され、孫の教育に関わる場面があっても、身の回りの面倒は主に母親の仕事であった。社会学、人類学の文献にも、文学作品の中にも、孫育てを一つの慣行として描いているものはほとんど見当たらない。果たして今日の農村の孫育ては規範とされているのであろうか。これを検証するには祖父母が孫を育てているという行為から規範の存在を推測するだけではなく、実証的なデータに基づいて分析する必要があり、特に当事者の意識を確かめることが重要である。

また、親世代が健在であり、都市に連れて行くことも、親の片方が農村に残って育児することも可能である。農村の隔世世帯の祖父母は、必ずしも孫育てを引き受けなければならないという状況にはない。したがって、祖父母世代の意識が不明なままでは、孫育てを引き受ける原因を明らかにすることができない。

祖父母世代の意識からアプローチすることは個人主義的な立場を取るという意味ではなく、「構造決定論でも主体的個人主義でもない新たな理論的パースペクティブ」（西野 1998: 55）で分析を行うことである。それに有益な示唆を与えるのは家族戦略論である。家族戦略論は、家族を「なんらかの規範、規則に受動的に従う存在ではなく、意図的な計画、計算に基づき選択を行う主体として、あるいは無意識的に家族の利益を高める選択を志向する主体として把握」（田淵 2012: 38）されている。

家族戦略論のアプローチから育児を分析する先行研究はいくつかある。日本においては、子育てや家事の面で親の協力を得やすいために、子育て中の若い世代は「近居」戦略（北村 2006: 35）をとって対処している。中国においては、女性農民工が親の協力を得るために子

供を遠く離れた祖父母の家に預けるということが、育児の家族戦略として解釈されている（徐2011）。この育児の家族戦略は親世代の核家族を単位として分析されているが、祖父母世代の当事者の視点が依然として欠けている。それでは、祖父母世代の意識にも育児のための家族戦略を確認できるのだろうか。ここに、孫育ては核家族に限らず、拡大家族レベルでの家族戦略となりうるのかを確認する必要がある。

家族戦略論を用いて祖父母世代の意識に関するデータを分析する際に、戦略の「単位」（田淵1999: 102）に留意する必要がある。戦略の当事者は基本的に家族や世帯とされるが、「個人が家族のそれとは異なる戦略を持ちうるということ自体」（田淵2012: 39）も想定しなければならない。なぜなら、家族内部の関係、「具体的には、家族内部には意思決定過程や分配過程における不平等や抑圧などの権力関係が存在するという問題がある」（田淵1999: 103）からである。そのため、祖父母世代の自らのための戦略性も考慮しなければならない。

家族戦略論を手掛かりに、本稿の事例分析では、①孫育てが祖父母世代に規範として認識されているか否か、②拡大家族レベルでの戦略性、③祖父母世代の核家族または個人のレベルでの戦略性、という三つの側面から祖父母世代が孫育てを引き受ける要因を分析する。加えて、この三つ要因の背景にある世代間関係に注目して考察を重ねる。

3 調査概要

祖父母世代がなぜ孫育てを引き受けるのかということ考察するため、隔世世帯が多い農村地域において、祖父母世代に対するインタビュー調査を実施した。

調査は、2011年5月から6月にかけて、中国河南省の河村（仮名）の隔世世帯の民家A（表1）に住み込み、主に世帯Aを参与観察しながら、8戸の隔世世帯を含む14世帯に対してインタビューを行ったものである。

河南省を調査対象に選定した理由は、①隔世世帯の割合が高いこと（2010年河南省の隔世世帯の割合が3.8%）と、②河南省が農業社会保障問題の諸領域の共通の特性を反映する中部地域に位置している（趙・張2007）ことによる。

河南省は中国の中東部に位置し、人口は2011年において全国一位の1.0489億人であり（河南統計年鑑2012）、そのうち農村人口の割合が多く、59.4%を占める。また、労働力輸出口も全国的に多く、2011年に河南省の省外（河南省以外の地域）に出稼ぎに行った農民工は1190万人で、省内に就職する農民工は1268万人である（河南省人民政府2012）。隔世世帯が全世帯に占める割合が3.8%で、全国6位である（第6回全国人口センサス調査）。

河村は河南省の東北部にある濮陽市に位置し、濮陽市中心部から40km離れた場所にある。調査対象を選定するにあたって、協力者に依頼し、村の村民委員会に調査の許可を取った。その際、村民委員会の家計担当（祖父A）が今回の調査の世話人になってくれた。世話人の世帯（世帯A）も隔世世帯であるため、寄宿をお願いした。また、人口登記表を参照し、世話人に実態を聞きながら、河村の人口と世帯の実態を集計した。河村の登記人口は767名、出稼ぎ労働者を除いた実際の人口は478名である。村の世帯数は191世帯で、隔世世帯は16世帯である。隔世世帯が村の全世帯に占める割合は8%である。世話人にこの16の隔世世帯から10世帯、ほかに隔世世帯を経験した3世帯と隔世世帯を経験したことがない3世帯を紹介

表1 調査対象

	世帯種類	主要調査対象者	養育する孫の数	隔世世帯歴	祖父母年齢	孫の年齢(内孫)	世帯年収
世帯A	隔世	祖父A	1	0.5	祖父49、祖母49	2,	10000元
世帯B	隔世	祖母B	3	8	祖父63、祖母61	4, 8, 11	15000元
世帯C	隔世	祖母C	5	3	祖父58、祖母59	7,8,11,15,16	10000元
世帯D	隔世	祖母D	6	6	祖父64、祖母66	6,7,8,13,19	2000元
世帯E	隔世	祖母E	3	10	祖母61	12,14,17	2000元
世帯I	隔世	祖母I	2	1	祖父62、祖母65	2,	10000元
世帯K	隔世	祖母K	2	2	祖父44、祖母43	2,3	2000元
世帯L	隔世	祖父L	3	7	祖父59、祖母60	1,5,8	8000元
世帯F	夫婦のみ	祖母F		2	祖父64、祖母66		10000元
世帯J	三世代(嫁)*	祖母J		1	祖父56、祖母55	1,3	6000元
世帯M	三世代(嫁)	祖母M		1	祖父57、祖母58	1,2,7	8000元
世帯G	夫婦のみ	祖母G			祖父63、祖母66		2000元
世帯H	三世代(嫁)	祖母H			祖父64、祖母60	2,4	1000元
世帯N	二世代(子・嫁)	祖母N			祖母50		2000元

注：「三世代(嫁)」は、祖父母、嫁と孫の三世代から構成された世帯をさす。

された。2つの隔世世帯から調査拒否があり、最終的に表1の14世帯が調査対象となった。

4 分析——孫育ての理由をめぐる規範と当事者の戦略

4-1 孫育てに対する祖父母世代の意識

まず、河村の祖父母らは孫育てが規範であると認識しているか否かを確認する。

河村では、祖父母らは積極的に孫の育児に参加している。孫が大きくなった世帯Fと、まだ孫がいない世帯G、Nを除き、世帯J、M、Hの祖父母も孫の育児に積極的に関わり、昼間は孫の世話をしている。祖母Hの場合は、健康状態が悪く、祖父母Hだけで孫育て(特に自立できない幼い子供の)ができないため、嫁が家に残ったが、昼間の孫の育児はやはり祖父母Hによって行われている。

なぜ孫育てを引き受けたのかと祖父母らに直

接に聞いてみたところ、以下のような返答が得られた。

祖母I：「自分の孫だから、当たり前じゃないか。」

祖父L、祖母F：「自分の家の子供、あなたが育てないで、誰が育てるの？これは祖父母としての義務なんだ。」

祖母J：「祖父母が孫を育てるべきだ。」

祖母K：「孫を育てるのは、『根』のため、息子のためだよ。」

これらの語りから、孫育ては祖父母の「義務」、「当たり前」のことであると当事者の祖父母らに認識されていることがわかる。この村では孫育ては一種の規範として定着しているようだ。語りのなかの「根」とは、家族の血統を次ぐための子孫を指し、すなわち「伝宗接代」(代々血統を継ぐ)の意識の現れであると理解でき

表2 孫育ての状況

	年齢	家族形態	兄弟姉妹	祖父母が孫の育児に参与していたかどうか			
				祖父母自身	備考	親世代	備考
祖母A	48	隔世	1番目 ／3人	なし	死亡	なし	親と2,3年間同居。三人兄弟の子供の数が多く、誰か1人を保育したら、不公平になるため、誰も保育しない。
祖母B	61	隔世	1番目 ／4人	なし	祖父が死亡、祖母に育てられていない。	なし	親と1,2年同居。兄弟の子供の数が多い。祖父母の子育てはまだ終わっていない(祖母Bの長男は祖父Bの六番目の弟より3歳上)
祖母C	59	隔世	1番目 ／5人	なし	祖父母も労働しなければならない。	なし	同居。祖父母も労働しなければならない。
祖母D	66	隔世	2番目 ／7人	あり	輪養*される時期のみ	あり	
祖母F	66	夫婦のみ	1番目 ／2人	なし	祖父母も労働しなければならない。	なし	義母を介護する必要があった。
祖母I	65	隔世	1番目 ／4人	あり		あり	長男7歳の時に分家するまで
祖母H	60	三世代(嫁)	3番目 ／6人	なし	子供が多いから、輪養されている。	なし	持病
祖父B	63	隔世		あり	兄弟が多いため		ずっと出稼ぎにいて、家のことはすべて祖母Bに任せていた。
祖父D	64	隔世		なし	死亡		

注：輪養とは、兄弟が順番に親の面倒を見ることをさす。

る。先行研究が指摘した孫育ての規範をこの村で確認することができた。

だが、孫育ては必ずしも昔から広く行われてきたものではない。調査対象者に個人史を語ってもらう際に、①自分が子供の頃に祖父母に育てられたのか否か、②自分が子供を生み、育児をするときに、親(義理親)からの育児援助は十分にあったのか否か、の二点について質問した。その結果は表2の通りである。

幼い頃に自らの祖父母に扶養されたことがあるのは祖母D、祖母Iと祖父Bの3人のみであった。祖母Aを除き、年齢幅は59～66歳であり、すなわち1940～1950年代には、河村では祖父母による孫育ての行為が多く見られなかったことが推測される。

次に、祖父母が自分の子供を育てる際に親(義理親)が十分に育児に参与したかどうかについて(祖父の2ケースは重複するため

除く)、十分に孫の面倒を見てくれたというのは祖母Dと祖母Iの2事例のみであった。あまり参与しなかったというのが5事例であった。親世代の年齢は20代後半から40代後半まで幅が広い。大まかに計算しても1960～1980年代には、河村では祖父母による孫育ての行為が多く見られなかったようだ。

祖父母世代が孫育てをしなかった理由については、1940～1950年代には「祖父母の死亡」が2件、「祖父母も仕事しなければならない」が2件、「兄弟が多いから」が3件であった。この時代の平均寿命は短いため、孫の面倒を見る機会がなかった人も多かった。「兄弟が多いから」という理由で孫育てに関わらなかった人も多かった。それは、「兄弟があまりに多く」、この子の子供(孫)の育児をやると、ほかの兄弟の子供の育児もやらなければならない、「面倒を見きれない」(祖母H)ことから、

同居しているにもかかわらず、どの孫の面倒も見ないということである。

1960～1980年代には平均寿命が大きく延び、孫の育児に関わる機会は増えた。祖母Fと祖母Hのように義理親の体が悪く育児できる健康状態ではなかった事例もあるが、少数であった。育児できる健康状態にあるが、1940～1950年代と同じく、兄弟数が多いこと(祖母A、B)や畑仕事があること(祖母C)、自分の育児があること(祖母B)を理由として孫育てにあまり関与しなかった⁵ものもいる。しかし、現在では仕事や兄弟の数、自らの子育てという課題に直面しながらも、それらは祖父母が孫育てを拒否する理由にはならなくなった。ほぼすべての祖父母は何人もの息子を持ち、自分で農作業しながら、すべての息子の家の孫の面倒を見ている。そのため、表1のように何人もの孫を養育している。長男の孫が大きくなってから、次男の孫を見るという場合もあれば、同時に4、5人の孫を養育している場合もある。

農作業と孫育ては祖父母が協働して行っている。3歳以下の孫を養育する場合、祖父母が交替して、農作業を行う。3歳以上の幼稚園と小学校に通う孫を養育する場合、孫が幼稚園または小学校にいる時に農作業を行う。

孫育てに関しても祖父母は協働している。食事や洗濯など身の回りのケアは主に祖母が行うが、祖父もときどき料理をする。祖父のもう一つの役割は幼稚園と小学校の孫の送迎である。昼御飯と昼寝の時間があり、夜の自習を行う場合もあるため、送迎は一日2～3往復となり、祖父が一日4～6回学校に通わざるを得ない状況になる。祖父母の毎日のスケジュールは孫の通学の時間に区切られている。

このように、1940年代～1980年代まで、河村において孫育ての慣行があったのかどうか

は本稿の調査対象者から確認できなかった。それにもかかわらず、今日の祖父母世代の多くが孫育てを自分の義務だと認識していることが明らかになった。

4-2 拡大家族のための育児の家族戦略

次に、祖父母世代の意識から、孫育ては単に上述した孫育ての規範に受動的に従っただけの行為であるのか、それとも主体的な行為であるのかを検証する。

親世代が子供を実家に残して出稼ぎに行く際に、祖父母世代と親世代の間に交渉があったのか否かを祖父母らに確認した。一人で育児できるほど健康ではないという理由で嫁の出稼ぎに反対して、昼間だけ孫育てをする祖母Hを除くと、多くの家族では交渉がなく、親世代の頼みに祖父母らは何の反対もせず、暗黙の了解に基づいて引き受けていた。この暗黙の了解は単に孫育ての規範に従っただけなのか、それとも「無意識的に家族の利益を高める選択」(田淵2012:38)をしたのか。孫育ての理由を「当たり前だ」というように答えた祖父母らに対し、さらに聞き取りを重ねてみると、下記のように親世代を含めた拡大家族の経済的向上のためという要因があると確認できた。

祖母J:「土地はそれぐらいしかなく、私がやってもそれぐらいの収穫で、それぐらいの収入になり、息子がやっても同じだから、外に行って、もっとお金を稼げるから、経済状況をすこし改善できる。」

祖母B:「どこが多く金を稼げるかを考えて、そこに行ってもらいたい。外でいっぱい金を稼いで、家に戻ったら、家を養わなければいけないし、子供を育てなければいけない。私たち二人は家で苦勞に耐えて、彼らは金を

儲ければいいのよ。」

この語りから、祖父母らは孫育てを家族の経済水準の向上を目的とする家族戦略の一環として認知し、親世代の生産労働を支えるために自らが再生産労働を担うという役割分担の意識が読み取れる。河村では一人当たり0.9畝（約600㎡）と、一家族の農地面積が決められている。散水、収穫などの作業はすべて機械化されているので、年寄りでもできる。そのため、祖父母のみで農業を行っても、親世代と一緒にいっても、家族の収入の総計は変わらない。家族の経済収入を増やすためには、土地を祖父母世代がすべて耕し、親世代が出稼ぎに行くことは一つの有力な選択肢であり、その最大化を求めれば、親世代が夫婦ともに出稼ぎに行き、祖父母世代が孫の面倒を見ることになる。

さらに、この家族戦略には現在の経済状況と生活水準の改善だけではなく、経済力を高めることにより、孫世代によりよい教育機会を与え、将来的にこの困窮した生活から脱出し、よい生活を送れるようにしたいという意図がある。

祖母C：「金を稼いで、孫たちは学校に行かせられるの。これからお金がかかるころが多いよ。私たちが苦勞するのは、子供たちを学校に行かせて、いい生活を送れるようにするためなんだ。」

祖母D：「うちは貧しいから、子供たちが学校に行けるように、ジジとババは苦勞し、嫁も出稼ぎに行かせた…私の最年長の孫は今大学四年生、インターンでも月三千六百元なのよ。すべては子供たちを大学にいかせるためなのよ。」

実際に家族の経済状況が改善されることや、孫が大学に進学したことは、家族戦略のフィードバックと理解できる。祖父母の孫育ての意識は、これらのフィードバックによってさらに高まっていくと考えられる。

孫育てに対する祖父母の積極的な意識は、自ら孫育てを引き受け、嫁を働かせた祖母Aの事例から読み取れる。孫が1歳になるまでに、長男は河南省の省都である鄭州で働き、嫁も一緒に鄭州に向かい、働かず育児に専念していた。しかし、孫が1歳を過ぎた頃、祖母Aは長男と嫁に「子どもを家に預けて、二人とも働いてお金を稼いだら」と提言した。すなわち、祖母Aは家族の収入を最大化するために、嫁に収入の高い生産労働を薦め、孫育てを自ら引き受けたのである。親世代はこの提案を受け入れ、夫婦とも都市で共働きするようになった。その結果、孫は祖母Aの家に預けられ、隔世世帯を形成した。

このように、本稿の調査者の祖父母世代が孫育てを引き受けたのは、単純に規範に従ったものではなく、無意識的に、または意図的に拡大家族の利益を高めるために孫育てを選択したものであるということが明らかになった。

4-3 夫婦・個人の老後生活のための戦略

最後に祖父母世代の核家族または個人のレベルでの戦略性を検討する。孫育てという行為には、祖父母にとっては育児援助を意味するのみではなく、以下に示されるように、親世代による老後扶養との世代間交換も意味する。

祖母B：「あなたがTa（「彼」または「彼女」という意味の中国語の発音）を育てないと、Taがあなたを扶養してくれないでしょう。（Q：そのTaは息子ですか？孫ですか？）

あなたがTaを育てないのに、あなたと親しくなれる？なれないのよ。ほら、長男は全然家に帰らないから、あなたを大事にできる？この小さな孫の面倒を見たらさ、いつでもお婆さん（私）のことを思ってくれる。嫁もそうだ。嫁は娘より大事なんだ。私は娘より嫁によくしている。娘は家を出たが、この嫁はさ、私によくしてくれて、私も嫁によくしてあげている。言っているのは次男の嫁、孫のこと。」

ここでは、全力で「よくしてあげる」ことによって、「よくしてくれ」ることを期待している様子が窺える。すなわち、農村の祖父母世代は子育て支援を通じて、老後に親世代が扶養してくれるように期待しているのである。孫育ては祖父母にとって、老後生活のための戦略という意味も含まれている。

この老後生活のための戦略は介護が必要となったときのものだけではなく、エンプティーン期（空巣期）の祖父母にとって、孫の存在は情緒的なサポートの側面も担う。自分の子供は、それぞれ自分が行ったこともないような遠いところに離れて行き、年をとった祖父母はこの娯楽の少ない小さな農村で、農閑期に家に戻れば「大人二人で喋ることもなく」（祖父A）となるような、寂しい生活になる。しかし、元気な孫がいれば、「お爺さん、お婆さん」と騒がしく呼ばれ、「家の中は賑やか」（祖母F）になり、生活も充実したものになる。孫の存在は、彼らにとって、喜びや幸せを感じられるものであり、情緒的なサポートの機能を果たし、農村高齢者の孤独感を緩和している。反対に、孫がいない祖父母のほうが、やや寂しそうに、隔世世帯の祖父母をうらやましがる面もある。娯楽施設などが少ない農村では、祖父母にとって育児は一種のライ

フスタイル上の余暇としての側面を持つ。孫育てに充実感や幸福感を感じ、それを求めていくのである。

このように、祖父母世代の核家族または個人のレベルでは、拡大家族レベルと異なった戦略性、すなわち老親扶養を促すため、老後生活の情緒的サポートを得るための戦略性もまた存在することを、インタビュー調査のデータにより確認することができた。

5 考察——世代間関係の変容

中国農村の祖父母世代が孫育てを引き受ける要因について、従来の研究は構造的な側面と主体的選択の側面から考察を重ねてきた。構造的な側面では都市化・産業化と都市・農村二元構造が指摘され、主体的選択の側面では「含飴弄孫」と「伝宗接代」などの規範が取り上げられている。だが、これらの研究では、実際の行為選択において重要な役割を果たす、祖父母世代の意識については見逃してきたと言える。本稿では、祖父母世代へのインタビュー調査のデータを用いて、孫育てを引き受ける要因を意識から明らかにしようとアプローチをした。具体的には、①当事者の間では孫育てが一種の規範として認識されていることを確認し、②拡大家族の利益のために、親世代を支援する育児の家族戦略であること、③老後扶養を促すため、また、エンプティーン期の情緒的サポートを得るための夫婦・個人の老後生活のための戦略であることを、当事者の語りを通じて分析してきた。

まず、河村の祖父母世代では孫育てが一種の規範として認識されていることが確認できたが、同時に多くの祖父母世代自身は子供の頃に祖父母に育てられた経験がなかったことも明ら

かになった。このことから、近年急増する隔世世帯に担われている孫育ては、かつては現在ほど広く浸透していなかったと推測される。すなわち、以前は孫育てが個別の事例として存在していた程度であり、現在のように祖父母が孫育てを引き受けるのは一般的なことではなかったと考えられる。近年それが広く見られるようになった理由として、本稿では「祖父母が孫育てをするべきだ」という意識によって人々が動員された側面を明らかにしたが、その背景には、都市化・産業化に伴う出稼ぎ人口の増加という構造的要因による側面が指摘できる。

次に、拡大家族の利益のための家族戦略の分析では、孫育てをするのは単に規範に従うのみではなく、親世代が仕事に専念し、家族全体の経済力を高め、孫世代によりよい教育機会を与え、家族全体が上位階層へと移動しようとする意図が存在していることを確認した。この育児の家族戦略の考えの背景にあるのは、祖父母世代の家族概念が依然として大家族の範疇にあるということである。ここでは、大家族の経済的利益を最大化するために、親世代が経済的収入の高い生産活動に従事し、体力の衰えた祖父母が家事や子育てなどの再生産活動を引き受けるという役割分担の構図がある。また、この役割分担の目的は単に現在の経済状況と生活水準を維持・改善するためだけではなく、家族の経済力を高めることで、孫世代によりよい教育機会を与え、将来の家族の存続と上位階層へと移動もまた意図している。このように、育児における主体性と戦略性が認められるが、家族の存続と繁栄を最も尊い目的とする、孫育てより上位の規範である「伝宗交代」に影響を受けている可能性は否定できない。

さらに、孫育てを引き受ける理由は、祖父母世代の夫婦または個人の老後生活のための戦略

としても捉えられる。この分析の中では、孫育てが老後扶養のための世代間交換として祖父母世代に意識されていること、孫育てによってエンptyネスト期の孤独感が緩和され、一種の情緒的サポートにもなっていることを明らかにした。楊の研究は、中国都市部の高齢者が子供に経済的援助を提供することで子供側の恩返しを促すことを指摘した（楊 2008）。本稿では、農村においても、祖父母世代が親世代に子育て支援を提供することで、親世代の老親扶養の意欲を促すことが確認できた。

事例から析出した孫育ての規範、拡大家族のための家族戦略、老後生活のための戦略という三つの要因の背後に共通するのは、世代間関係の変容である。従来は老親扶養が農村における一つの強固な規範として共有されていた。これは、「養児防老」という表現に表わされるように、親が子を養育するのに対し、子が大人になって、親を扶養するという「フィードバック式」（費 1983: 7）の養育—扶養関係であった。しかし現在では、孫育てと老後扶養が併存するようになり、従来の養育—扶養関係が変容したと考えられる。すなわちこれは、親の養育の内容に、子の養育のみではなく、孫の養育も含まれるようになったことを意味する。

このように祖父母世代の義務だけが大きくなったのは、世代間関係の権力の均衡が崩れたことを示唆する。土地の私有制度を基礎とする中国の伝統社会における自給自足の小農経済では、土地、家と家畜などの所有権は一般的に家長である父親にあるため、家長が大きな権力を持ち、親が生きている間に家産を分割しないのが一般的であった（王 2002）。親の家産の主導権と伝統社会の強い孝の規範により、世代間関係の中で親はより強い権力を持っていた。

人民公社の時代に土地の私有制が廃止され、

家長の土地の所有権がなくなると、家長と家族構成員との間に権力の差はなくなった。しかし、世代間関係は依然として均衡を保っていた。それは、労働力を失った高齢者が「集体制度」⁶によって保障され、労働をしなくても物質的な収益が確保できたこと、また一方で、当時の支配的な意識⁷が親孝行の美德を提唱していたことなどに起因する（賀 2008）。

1990年代の改革開放以降、集体制度が廃止され、産業化により農業以外の就労機会が増え、収入も農業収入より大きく向上すると、出稼ぎの子供のほうが親よりも収入が多くなるという現象が見られるようになった。世代間の経済的な地位の変動は、世代間の権力構造を変化させ、制度による保障をも喪失させ、親世代にとっては、老後の生活が必ずしも予測できるものではなくなった。このような中で、親子の世代間関係を強化するためには、従来の養育―扶養の規範だけでは拘束力が十分でなくなった。老後扶養を安心して期待するためには、さらなる互酬性規範を伴う社会的交換関係を持たなければならなくなった。

要するに、親が経済的優勢の地位を失い、制度的保障も十分ではなくなった一方で、産業化により子供の経済力が増加した結果、もとの世代間関係の均衡が崩れてきたのである。均衡の崩壊は親世代に老後不安をもたらした。労働力の衰えていく親は、自分の稼働能力が完全に失われた時の老後扶養のために、子供への育児援助を行うという選択によって、互恵的な関係を築くことを期待するようになっていく。

6 結論

本稿は近年の中国農村において隔世世帯が急増してきたという現象に注目し、これまでの研

究に欠けていた当事者の意識からの視点を補足するために、祖父母世代へのインタビュー調査データの分析を通じて、孫育てを引き受ける意識的な要因を明らかにした。ここでは孫育ての規範を確認しつつ、そこに当事者の戦略性もまた存在することを明らかにした。さらに、これまでの都市化・産業化や都市・農村二元構造に帰結させる議論では見えてこない、規範や戦略の背後にある社会的な変動にたどり着いた。それはすなわち、農村における親子の間の世代間関係の変容である。当事者の戦略性や世代間関係の変容という社会的な要因は従来の隔世世帯の研究が見落としていた重要な論点である。

最後に本研究の限界と課題を指摘して本論を終えたい。中国の南部、中部、北部の11省のフィールドに基づいた賀・郭（2012）は、中国農村の世代間関係の特徴を類型化し、世代間関係が地域ごとに異なることを指摘した。それによれば、河南省を調査対象とした本研究の結果は北方農村の地域特性を持つことになる。だが、一方で陳（2009）などの研究では南方の農村においても世代間関係の変容が報告されている。また、河村では内孫を育てるのが一般的であるのに対して、沿岸部の農村では外孫を育てるのが一般的であるという指摘がある（落合ほか 2004）。このように、経済的条件や地域文化の違いによって、祖父母世代の意識が異なる可能性がある。これらの変数を分析に取り入れ、より広範囲な調査を行って、研究を精緻化していくことが今後の課題となる。

付記

本稿の一部は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果である。

注

¹ 池岡（1997）、落合ほか（2004）、石原（2009）など日本の先行研究においても中国の「隔代家庭」について論じられているが、ここでは「隔代家族」という訳語を利用している。本論では、このような家族形態は中国に限らないこと、「拡大家族」と同じ発音で議論する際に混同しやすいことという二つの理由により、「隔世世帯」という訳語を用いる。

² 郭（2008）の中に類型別の世帯人口の年齢分布図が記載されているが、隔世世帯の比率は記載されていない。このデータは北京大学の郭志剛教授から分析データを御提供いただいたものである。この場を借りて、郭教授に感謝を申し上げたい。

³ 郷と鎮は同じレベルの行政単位であるが、郷より鎮のほうは人口が多く、非農業人口が多く、都市化が進んでいる。現行の基準は1984年に国務院が公布したもの（国発〔1984〕165号）に則っている。それによると、総人口2万人以下の郷で非農業戸籍人口が2000人を超えた場合と、総人口2万人以上で非農業戸籍人口が10%を超えた場合、郷から鎮に移行することができる。全国人口センサスのデータは都市、鎮、郷村の3つに分けて集計されている。隔世世帯の場合も、鎮の高齢者隔世世帯の割合は都市と同じく近年減少傾向にある。それは鎮の都市化によるものであると考えられる。

⁴ 祖父母世代が孫育てを引き受けることには構造的な要因も考えられるが、本稿の趣旨から外れてしまうため、簡潔に二点を述べることにする。まず平均寿命の延伸が取り上げられる。中国人の平均寿命は、1949年以前の35歳から、1957年の57歳、1973 - 1974年の65歳、1981年の67.9歳（徐1986）、2010年の74.8歳（第6回全国人口セ

ンサス調査）と、年を経るごとに延びている。平均寿命の延伸が、祖父母が孫育てをする可能性を高めたことは否定できない。また、中国独自の構造的要因として、1節で議論した都市化・産業化と都市・農村二元構造のなかの農村家族が大きく変動したため、孫育ての必要性や可能性が高まったことも考えられる。

⁵ 当時の祖父母世代からの援助が少なかったため、1940～1950年代においては、「爺と婆も畑で働かなければならないし、母もそうだった…私が三、四歳の時から四人兄弟の面倒を見て、四人の兄弟を育てたのは私だよ」という祖父母Cの発言のように、兄弟による子守が行われていた。または、1960～1980年代では、祖母Cのように、最低限の安全措置をとった「置き去り」などで対処していた。「彼ら（義理親）も畑の仕事をしなければいけないから、誰も手伝わなかったよ…私は子供をベッドに置いて、ドアの鍵を掛けて仕事にいったのさ…子供が歩けるようになって、村に池とかに落ちたら大変なので、庭の地面に穴を掘って、子供をそこにに入れていたのさ」（祖母C）。

⁶ 集体制度とは、土地など生産手段の公社所有制度とそれに基づく分配制度を指す。高齢者が労働できなくなっても食料や生活用品が供給されるため、高齢者の子供に対する依存度は低い。

⁷ 人民公社時代の支配的な意識としての集体主義は、個人より集団の利益を優先し、家族より集団の利益を優先すると主張されていた。そこにおいても、家族が育児と高齢者扶養における役割を重視し、「尊老愛幼（高齢者を尊重し、子供を愛する）」が伝統的な美德として提唱され、高齢者の権利が保障されていた（賀2008: 109）。

文献

Bourdieu, Pierre, 1972, "Les strategies matrimoniales dan le systeme de reproduction," *Annales*, 4-5, juillet-octobre; 1105-27.

- (= 2007, 丸山茂・小島宏・須田文明訳「再生産戦略システムにおける結婚戦略」『結婚戦略』藤原書店, 199-244.)
- 陳柏峰, 2009, 「代際関係変動与老年人自殺——対湖北京山農村の実証研究」『社会学研究』2009(4): 157-76.
- 費孝通, 1983, 「家庭結構變動中的老年贍養問題」『北京大学哲学學報』1983(3): 6-15.
- , 1998, 『郷土中国 生育制度』北京大学出版社.
- 國務院人口普查公室, 2012, 『中国 2010 年人口普查資料 (上中下)』中国統計出版社.
- 郭志剛, 2008, 「關於中国家庭戶變化的探討与分析」『中国人口科学』2008(3): 2-10.
- 河南省人民政府, 2012, 「河南農民工省内就業人數達 1268 萬人 首次超過省外」, 河南省人民政府ホームページ, (2013 年 1 月 30 日取得, <http://www.henan.gov.cn/bsfw/system/2012/03/27/010298764.shtml>).
- 賀雪峰, 2008, 「農村家庭代際關係的變動及其影響」『江海學刊』2008(4): 108-13.
- 賀雪峰・郭俊霞, 2012, 「試論農村代際關係的四個維度」『社会科学』2012(7): 69-78.
- 黃詳詳, 2006, 「論隔代教育与兒童心理的發展」, 『經濟与社会發展』4(4): 203-5.
- 池岡義孝, 1997, 「現代中国都市住民の家族認識の構造」『家族研究年報』22:48-69.
- 石原邦雄編, 2004, 『現代中国家族の変容と適応戦略』ナカニシヤ出版.
- , 2009, 『日本と中国における家族生活——マイクロデータ活用による基礎的比較 (2)』(マイクロデータの相互利用による家族の国際比較研究) 2008-2010 年度科学研究費補助金研究成果報告書 (研究課題番号: 20530477) 成城大学.
- 北村安樹子, 2006, 「『近居』という家族戦略」『ライフデザインレポート』2006.11-12:35-7.
- 林耀華, 1989, 『金翼——中国家族制度的社会学研究』三聯書店.
- 劉永奇・劉世德, 2012, 『河南統計年鑑 2012』中国統計出版社.
- 李立靖, 2004, 「“三女童出走” 引發的社会憂慮——貴州省安龍県“留守孩子” 熱点透視」『中国民族教育』2004(5):16-9.
- 西野理子, 1998, 「『家族戦略』研究の意義と可能性」丸山茂・橘川俊忠・小馬徹『家族のオートノミー』早稲田大学出版部.
- 落合恵美子・上野加代子, 2006, 『21 世紀アジア家族』明石書店.
- 落合恵美子ほか, 2004, 「変容するアジア諸社会における育児援助ネットワークとジェンダー」『教育学研究』71(4): 382-98.
- 孫鵬娟, 2006, 「労働力遷移過程中的農村留守老人照料問題研究」『人口学刊』158(4):14-8.
- 田淵六郎, 1999, 「『家族戦略』研究の可能性——概念上の問題を中心に」『人文学報 社会福祉学』(首都大学東京) 15: 87-117.
- , 2012, 「少子高齢化の中の家族と世代間関係——家族戦略論の視点から」『家族社会学研究』24(1): 37-49.
- 天童睦子, 2004, 『育児戦略の社会学——育児雑誌の変容と再生産』世界思想社.
- , 2013, 「育児戦略と見えない統制——育児メディアの変遷から」『家族社会学研究』25(1):21-9.
- 王躍生, 2002, 「20 世紀三四十年代冀南農村分家行為研究」『近代史研究』2002(4):157-96.
- , 2006a, 「当代中国家庭結構變動分析」『中国社会科学』2006(1):96-108.

- , 2006b, 「当代中国城郷家庭結構變動比較」『社会』26: 118-36.
- , 2008, 「中国家庭代際關係の理論分析」『人口研究』32(4):13-8.
- 許伝新・張登国, 2011, 「流動還是留守：家長的選択及其影響因素」『中国青年研究』2010 (10) : 52-5.
- 徐勤, 1986, 「關於世界人口平均寿命的分析与我国人口平均寿命的增長趨勢」『人口研究』1986(4):50-5.
- 徐琴, 2011, 『中国女性農民工のライフコースと家族生活——家族關係維持のための戦略に注目して』お茶の水女子大学修士論文.
- 楊舸・段成榮・王宗萍, 2011, 「流動還是留守：流動人口子女隨遷的選択性及其影響因素分析」『中国農業大学学报 (社会科学版)』28(3):85-96.
- 楊雪, 2008, 「中国都市部の高齢期の世代間援助に見られる家族戦略——瀋陽市の事例を通して」『家族社会学研究』20(1):57-69.
- 趙曼・張広科, 2007, 「中国農村社会保障体系研究的基本枠架」『中南財政法大学研究生学報』2007(4):10-4.

(ちょう けいげん、東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員、newagemaker@gmail.com)
(査読者 野辺陽子、劉楠)

Skipped-generation Households and Intergenerational Relationships: Analyzing the Reasons for Grandparenting in Rural China

Jiyuan ZHANG

Recently, the number of skipped generation households has dramatically increased in China. Some studies concluded that the increase in migrations from villages to cities and the urban-rural dualistic social structure led to the emergence of skipped-generation households. These studies regard grandparenting as prerequisite. This paper focused on the prerequisite, and investigated the factors that contribute the grandparenting . As a result, three reasons were found for why grandparents became amenable to providing full-time child care for grandchildren. The first is that a new grandparenting norm has been formed. The second is that grandparenting is a part of child-rearing strategy. The third is that grandparenting also is an elder care strategy. Finally, we indicated that the grandparenting norm and family strategy is a kind of manifestation of the changes in intergenerational relationships.